

館山支部だより Vol.111

<支部連絡窓口>
千葉県隊友会館山支部
事務局(代表)川村 巖
〒294-0032 館山市笠名1357
TEL 0470-22-0230



真夏の花 ハイビスカス
朝開いて夜閉じる
<7月下旬 社宅の庭先に>

完全終息の願いも空しく、7月に入り全国各地で過去最多のコロナ感染者の発生が続いております。これが最後の大波であって欲しいのはやまやまですが、まだまだ予断を許さないところです。今までに六つの大波を乗り切ってきた経験、ノウハウを十分に生かし、さらに各自の工夫努力によりこの異常な事態を克服しようではありませんか。

<川村 記>

支部の活動概要

《6・7月活動実績》

- 6.19(日) 旧館砲校戦没者慰霊祭(「櫻街道」主催)
- 7.23(土) 県隊友会前期支部長会議(千葉県護国神社)
- 7.30(土) 支部役員会(コミセン)

《8・9月活動予定》

- 9月下旬 館山航空基地開隊70周年記念行事(未定)
- 9.24(土) 支部役員会(コミセン)

県隊友会前期理事役支部長会議 7/23(土) 千葉県護国神社

この度の県理事役・支部長会議は、この春に千葉市内の若葉区に新築された千葉県護国神社の社務所会議室で行われました。千葉県護国神社は、県隊友会として毎年春・秋の例大祭で多くの会員を募って交通統制や清掃作業等の奉仕活動を続けてきた由緒深い場所でもあります。

開会に先立ち、理事役・各支部長全員が昇殿し、参拝と玉串奉奠の儀が執り行われました。会議は、折しも千葉県内の新規感染者が過去最多ということもあり、ソーシャル・ディスタンスの保持など徹底した感染防止策を講じる中で行われました。

議事は県隊友会が直面している事案を重点的に取上げ、特にコロナ禍の影響で大きく停滞している入会促進活動、会勢拡大施策について審議されましたが、細部については次回の「隊友千葉だより」に掲載される予定ですので、ここでは割愛することにします。 <支部長>

千葉県護国神社について

戊辰戦争以来の千葉県出身国事殉難者5万8千余柱の祭神を祀る神社として長いこと祭事を行ってきたが、社殿の老朽化、台風被害の増大に加えて非耐震構造であるため、今春若葉区に移転(遷座)。新築の社殿は近代化とともに遺族関係者等の高齢化の配慮から、階段や敷居を無くするなど随所にバリアフリーの設計が施されている。

<川村 記>



<新築の社殿を背景に記念撮影>
県隊友会本部提供

総間限定求人情報 隊友会本部事業課

自衛隊に対する業務支援の一環として、次のような求人情報が届いております。

- 勤務先、業務内容: 陸自高射学校、需品学校 学生・教材の管理業務、厚生業務
- 期間: 令和4年9月中旬～令和5年3月末
- 給与等: 月額24～25万円、諸手当、保険、通勤手当支給
- 年齢・資格: 定年退職後～70歳位、パソコン技能(ワード・エクセル等経験)

応募締切りは8月末ですが、それ以前に「期間限定求人情報」への「利用者登録」を済ませることが応募の要件になるため、関心のある方、希望者は至急支部事務局へ問い合わせ下さい。

《支部事務局、0470-22-0230、メアド g_marine@f5.dion.ne.jp》

随想「終戦後77年・戦争体験の無い者の戦争観」

終戦の年(S20)の小学校1年生の春、家族ぐるみで東北の片田舎から名古屋に引っ越すことになった。現在の小牧市の近くで母方の実家のある町だった。海軍の飛行機乗りだった父親が前の年の暮れに沖縄空に発令され、いよいよ来るべきものがきたと観念したのか、家族を身寄りの母方の実家にあずけることにしたのであろう。

このころは名古屋地方もまだ空襲はなかったように記憶している。ただ名古屋へ向かう列車は出征兵士であふれていた。一人の若い兵士が、我々子供たちと目が合うとおどけた表情で相手をしてくれたのが妙に印象に残っている。この兵士たちもどこへ赴任し、どれだけの人が生きて日本の土を踏むことができたのだろうか。S18年も後半に入ると出征する兵士と帰国する英霊が急激に増え出した。本土ではまだ生々しい戦闘場面こそ見られなかったが、銃後における戦争(銃後の守り)はずでに極限状態に達していたのかもしれない。

私が初めて戦争を「目撃」したのは、小学2年生になった春先の正午だったと思う。雲一つない晴れ渡った名古屋市の上空に悠々と侵入してくるB29の大編隊が目に入った。銀翼というか紺碧の空に白く透き通る「白魚(しらうお)」の群れを見るようであった。やがて編隊は一斉に爆弾を投下した。30kmほど離れていたがその時の状況は無声映画を見るように手に取るように分かった。爆弾が地上に達すると広範囲にわたって黒っぽい煙がもくもくと立ち昇った。炎は見えなかったが現地はさながら修羅場、生き地獄と化したことであろう。この間、友軍の高射砲は沈黙し戦闘機の姿も見かけなかったのは子供心にも不思議でならなかった。

時折、母に連れられて親戚に食糧の買い出しに出かけたことがある。物々交換、代価はすべて母の着物であった。小牧で鈍足のローカル線に乗換えて親戚に向かう途中、線路沿いに陸軍の飛行場の外柵が現れ、灌木の中に駐機する数機の戦闘機とカーキ色の軍装の陸軍兵士が銃を構えて警備していた。初めて間近に見る本物の軍用機に目を見張った。

名古屋市と接する小牧には、名古屋飛行機(現在の三菱重工)はじめ沢山の軍需工場があったため、5月頃からB29や艦載機等による空襲が次第に増え出した。連日のようにサイレンがなり響き、その都度防空壕に逃げ込んだ。 <以下次回に譲る>

《匿名、84歳、海》

終戦を館山航空基地で迎えた高峰秀子・戦争末期の館山点描

たしか平成17年ころの文芸春秋の終戦特集「私の8月15日」の中に、往年の大女優高峰秀子(2010年没)の回想記が載っていた。「私は昭和20年8月15日の敗戦を館山海軍航空基地で迎えた」という書き出しで、館山での映画のロケーション撮影の準備に入った7月中頃から終戦までの状況が綴られている。約60名の東宝映画の撮影隊が市内の旅館を借り切り、主として館山基地で撮影されたようである。題名は「アメリカようこそ」、言い換えれば「アメリカへまっしぐら」というように戦意高揚映画として軍の協力のもとに作られたものであろう。映画は、基地付近に住む海軍軍人の未亡人とその娘の物語で、広い屋敷を搭乗員の下宿として開放し、娘と特攻隊員という設定の青年将校との間に芽生えた慕情をストーリーとしたものということで、娘役を高峰秀子が演じ、監督は東宝の山本嘉次郎であったという。7月末からロケーション撮影が開始されたが、度重なる空襲警報のサイレンで中断され、遅々として進まなかったという。

かくして8月15日、東宝から応援に駆け付けた踊り子や楽団とともに、朝から館山基地と洲ノ崎航空隊(「州ノ空」)の隊員たちの慰問が行われた。館山航空隊の慰問が終わって慰問団はステージ衣装のまま軍のトラックで隣接の州ノ空へ運ばれた。

天皇陛下のラジオ放送があったのは、州ノ空の慰問が終わった直後の正午のことだった。館山基地の広い飛行場に据えられた一つのラジオを前にして全航空隊員が整列し、ロケ隊と慰問団も最後尾に並ばされた。ラジオから流れる天皇陛下の肉声は、ピイピイ、ガアガアという雑音にまぎれて一言も聞き取ることができなかったとのこと。

大筋はこんなところであるが、回想記は館山での一か月間、連日連夜のごとく空襲のサイレンに悩まされ、晴れ渡った真夏の太陽に銀翼をきらめかせたB29のゴーという爆音とともにおびただしい数の艦載機のキューンという金属的な爆音、そして街中どこかまわらずバリバリと機銃掃射を浴びせかける艦載機とズシーンというB29が落とす爆弾の響き、モウモウたる砂塵、硝煙と鼻をさす火薬の匂いは生き地獄であり、館山はまさに戦場であった様子が生々しくリアルに描かれている。

館山は本当に戦場になったのだろうか？

館山の空襲に関する旧軍の記録は極めて少ないが、米戦略爆撃調査報告及び旧海軍の記録によれば、米機が館山に初めて爆弾を落としたのは、S20. 2. 10と断定してもよい。東京方面の戦略爆撃を終えたB29の100機編隊が、各地へ分派しその中の1機が館山に飛来して宮城・笠名地区に数発爆弾を投下している。館山基地・州ノ空をターゲットにしたものであろう。当時館山基地に駐留していた252空派遣隊の戦時日誌にも「正午B29一機来襲、投弾」と記録されている。

その直後の2月16日・17日、2日間にわたって館山基地は二十数波に及ぶ艦載機の攻撃を受けている。2月19日の硫黄島上陸の前哨戦として行われた関東各地の飛行場に対する艦載機延べ千数百機による攻撃であった。(903空司令部戦闘詳報) 前述(2月10日)のB29単機による爆弾投下は、単に残弾処理ではなくこの作戦のための重要な偵察行動(撮影)だったのである。

B29の大都市への戦略爆撃も次第に中小都市に対する戦略・戦術爆撃へと移り変わっていった。5月19日には、二十数機のB29が館山に襲来し、川崎地区(今のイオンタウン付近)に爆弾を投下している。池貝鉄工所を狙った小規模な戦略爆撃と言えようが、この空襲で近辺の住民に二十数名の犠牲者が出ている。館山では民間の犠牲者が出た数少ない事例であろう。

硫黄島・沖縄戦の終結とともに米機動部隊の本土への接近により、次第に艦載機による本土各地への戦術攻撃が増え出した。館山基地が艦載機の戦術攻撃のターゲットになったことは否めない。写真に残る本部庁舎玄関の爆弾の大穴はこの時のものであろう。しかしながら館山の市街地に対す無差別銃爆撃があったという記録も住民の話も聞かない。

とかく話には「ありもしない尾ヒレ」が付くことが多いが、物事の本質を見失うことになりかねないと思う。高峰秀子の空襲の話も決して作弄的なものとは思わないが、何回か経験した各地でのロケの記憶が錯綜したものであろう。

《自称地域史探索マニア その35》